

[図 2] 龍面獣身の白沢(『三才図会』 鳥獣 4、上海古籍出版、1988年)



[図1] 虎面鱗身の白沢(『大明会典』、国立公文書館

場中国では、虎面鱗身(図1参照)や龍面獣 日本にも伝来し、特に江戸時代に広く流行し 近世ではもっぱら白沢そのものを絵に描いた 親しまれた。 日本では江戸時代には人面牛身の白沢が広く 身(図2参照)で描かれることが多かったが、 江戸で流行した典型的な白沢の姿である。本 両脇を合わせて九つの眼をもつという異形は、 二四年)の摺り物(柱絵)もそうした江戸の 懐中すれば、悪しきモノノケの禍から逃れら 「白沢の図」が用いられた。この白沢の図は、 白沢の図のひとつである。人面牛身に、額と れると信じられたのである。 た。家の壁や戸にかけるか、小さくたたんで 右頁右に掲げた北尾政美(一七六四~一八

◆◆ 政美と

フであり、各人の作品のほか、伝・雪舟筆 後に狩野惟信の門人となった。師の重政も若った。 世絵師であり、 とされる模本なども残っている。政美もこう した先達に倣い、白沢の姿を描いたのだろう。 また、狩野派でも、白沢はよく描かれたモチ 山』「白沢」)、後に一枚摺りでも売り出された。 くして白沢を描いており(右頁左『絵本荒獅 北尾政美は鍬形蕙斎の名でも知られる浮 題記に篆書で「白獏之図」とあるのは、伝 はじめ北尾重政に師事して、

名を呼べ。その怪、忽ち自滅して地に入るこ

末尾に述べる「凡そこの怪有れば則ち鬼の

想像界の生物相

北尾重政・政美の描いた 「白沢の図」

日本学術振興会特別研究員 PD(大阪府立大学)

ささき きとし 佐々木 聡



資料名 | 『絵本荒獅山』(北尾重政筆)

資料 ID | F117000210

出版年 | 天明 7 (1787) 年

地域|日本

サイズ | 縦 20.5cm×横 14.3cm

伝説の王が巡行のおり、

白沢なる神獣と出会

『瑞応図』という書物によれば、黄帝という

い、悪しきモノノケの禍から人びとを救うた

より書かれたのが、モノノケの知識を詰め込 めの知識を授かったのだという。この伝説に

ろまで現存していたが、後に散佚してしまい、 んだ書物『白沢図』である。この本は北宋で

語の「怪異」とは異なる語感かもしれないが、 の人屋に上る」など、日常的ではないが、稀、怪異といっても、「蛇の人家に入る」や「狗を起こす鬼の名が列挙されている。もっとも 広記』からの抜粋だが、そこには怪異とそれ たものだろう。白楽天の「獏屏賛」に「そば同じものとされたことを踏まえ洒落でつけば同じものとされたことを踏まえ洒落でつけ 説上の動物である「獏」と「白沢」がしば にありそうな現象ばかりが並ぶ。これは現代 著した『古今韻会挙要』獏条に「今俗之(獏) れたが、中国でも、例えば元の時代に熊忠が 辟く」とあるように、獏もまた病や邪を退け 現象こそが怪異であり、大きな禍の前触れと むしろ前近代の東アジアではこうした稀有な を白沢と言う」などとある。 この説は江戸の随筆でもしばしばとり上げら 辟邪獣としての共通点から生まれたのだろう。 るとされた。白沢=獏という俗説もこうした の皮に寝れば瘟を辟け、その形を図けば邪を して恐れられたのである。 画賛は政美の作ではなく、元の類書『事林画賛は政美の作ではなく、元の類書『事林

資料名 | 版画「白獏之図」(北尾政美画)

地域|日本

サイズ | 縦 68.3cm×横 11.7cm

標本番号 | H0277680



呪術であり、いにしえの元祖『白沢図』から

を呼んでその禍や病から逃れるという古代の

と三尺。禍を転じて福と為す」とは、

受け継がれる辟邪思想の系譜を思わせる。